

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 21 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370956

研究課題名(和文) 楽園観光地における宗教と観光の合理化に関する研究

研究課題名(英文) On Rationalizations of Tourism and Religion in "Paradise" on earth

研究代表者

吉田 竹也 (YOSHIDA, Takeya)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：10308926

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インドネシアのバリ島、および国内の沖縄地域を事例とし、「楽園」と呼ばれる観光地に関する資料にもとづいて、観光と宗教の合理化について探求しようとするものである。

本研究は、理論研究と民族誌的研究からなる。前者については、マックス・ヴェーバーの合理化論を現代社会理論に接続すること、後者については、バリ島の約100年間にわたる観光と宗教との関係、沖縄本島地域の慰霊と観光との関係を、明らかにすることが主題である。

研究成果の概要(英文)：This study focuss on the processes "rationalizations" of tourism and religion at "Paradise" touristic sites, from the case studies of Bali, Indonesia and Okinawa, Japan.

The main theoretical theme is to connect Max Weber's discussions concerning rationalization to modern social theories, and the main ethnographic theme is to describe the last hundred years processes and relationship of Hindu reformation and touristification in Bali, and the transition from the dead-worship tourism to "Paradise" tourism in Island Okinawa.

研究分野：文化人類学

キーワード：楽園 観光 宗教 合理化 バリ島 沖縄本島

## 1. 研究開始当初の背景

報告者は、インドネシアのバリ島の宗教を主題とした人類学的研究に取り組んできた。そして、バリの宗教の構築・形成過程を記述しつつ、人類学的研究がそこに果たした再帰的な連関性に着目した研究を、単著『バリ宗教と人類学』(引用文献1)として平成17年に出版し、その後、観光を視野に入れ、フィールドとして沖縄にも注目した、研究のさらなる展開を図った。この中で、平成18～20年度の科学研究費補助金(萌芽研究)の交付を得て「再帰的な観光人類学研究の探求」に取り組み、その成果として、引用文献2～6、および本研究採択後に刊行された引用文献7などの研究業績を積み上げてきた。本研究は、これら2つの研究、つまりバリ宗教論とバリおよび沖縄の観光論とを踏まえ、創発的な観点に立って、楽園観光地における宗教と観光との関係性を探求しようとするものであった。その主たる事例はバリである。バリにおける観光と宗教の間の影響関係は、正負両面を示す錯綜した状況にある。本研究は、その複雑な関係性を、ヴェーバーの合理化論を導きの糸としながら、追求しようとするものであった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、マックス・ヴェーバーの合理化論を読み直し、これを理論的枠組みとする視点から、インドネシアのバリ島における宗教と経済の関係を、ヒンドゥーと観光の関係という具体的な局面に絞って検討し、現代のバリ社会、ひいては「楽園」イメージを前面に推しだした観光地(報告者は、これを「楽園観光地」と名づけている)のもつ構造の一端を明らかにしようとするところにある。バリ島の宗教の合理化に関する議論としては、1950年代の調査に基づくクリフォード・ギアツの研究が存在する。しかし、ギアツの議論は、ヴェーバー理解という点でも、また民族誌的事実の把握という点でも、不十分なものといわざるをえない。本研究は、ヴェーバーの宗教経済論にあらためて立ち返りつつ、ギアツの議論を再検証し、現代社会理論との対話を通じて合理化という概念の彫琢可能性を検討するという視野から、宗教と観光の関係をめぐる人類学的研究の知見を更新しようとするものであった。

## 3. 研究の方法

本研究は、現代社会論や観光論の成果を踏まえつつ、ヴェーバーの合理化論を再検討し、観光と宗教の関係という論点に関わる理論的枠組みを整理する議論、バリの宗教および観光に関する既存の民族誌的記述の整理と、あらたなデータの収集にもとづく民族誌的トピックの追加による、事実関係の記述

的理解、このバリに関する宗教と観光の関係の把握という一義的な主題を補うための、沖縄周辺地域を第二のフィールドとした比較検討、の3つから成り立つものであった。4年におよぶ研究期間内に、これら3つの問題領域に関わる作業を交差させつつ、同時並行的に進め、それぞれを一定段階でまとめ、学会発表や研究論文に結実させていく、というのが当初の計画であった。また、おそらくこの4年間の研究期間内では難しいであろうが、いずれそれらにさらなる議論を付加しつつ、宗教と観光の複雑な連関性を理論面と事実関係の両面から捉えた総括的な研究成果として、本研究を単著にまとめたい、というのが長期的な研究の目的であった。

以上のように、本研究は、理論研究と国外・国内の複数のフィールドに関する研究を総合したものである。研究経費は、おもに理論研究におけるデータを収集・整理するための図書費と、バリおよび沖縄におけるフィールドワークにもとづく民族誌的資料の収集・整理のための調査旅費に充てた。ほかに、初年度のみ、PC等の機器購入費に約10万円を充てた。

## 4. 研究成果

(1)平成25年度は、研究の基盤を築く年度と位置づけ、理論研究の面では、とくにヴェーバーの合理化論に関する先行研究の整理をする作業を優先させた。その中で、ヴェーバーを古典とみなしてその解釈を行う研究よりも、むしろベック、ギデンズ、ルーマンあるいはフーコーらの、現代社会理論へのヴェーバーの発展的解消に注目すべきことが明らかになった。とくに、合理化論とリスク社会論との接合可能性が、ひとつのおおきな課題として浮上した。これは当初想定していなかった論点であった。その可能性を十分突き詰めるには至らなかったが、次年度の学会発表を準備する中でその議論可能性を探るべく、平成25年度秋に学会エントリーの手続きを行った(査読付き学会発表であり、エントリーは前年度になる)。一方で、あらためてギアツのバリ宗教合理化論について再検討し、これをヴェーバーの合理化論と対比させる作業にも着手した。民族誌研究の面では、バリと沖縄において、これまでの継続的な調査の延長線上において、しかし観光と宗教との関係という新たな視点からの、資料収集を行った。この年度においては、人類学的観光研究の可能性と限界をフーコーの反科学の視点から論じた単著を、本研究における議論の進展を若干加味するかたちで、出版した。

(2)平成26年度は、理論研究の面では、ヴェーバー合理化論の可能性を現代社会理論とくにリスク社会論との関係において探求するという作業と、ギアツのバリ宗教合理化

論とヴェーバーの宗教合理化論との差異と共通性を整理するという作業に、取り組んだ。前者については、前年度にエントリーした文化人類学会での学会発表において、バリ観光のリスクの高まりという論点を提起した。また、リスク論と観光論・宗教論との接合可能性について考察する中で、『リスクの人類学』という研究の書評を『年報人類学研究』に投稿した。これは、査読を経て、年度末の掲載が決まった。ギアツとヴェーバーの対比というもうひとつの論点については、議論に一定の見通しがついたので、その議論の暫定的な内容を平成27年度の文化人類学会で発表する方向で、平成26年度秋に手続きを行った(査読付き学会発表、エントリーは前年度)。こうしたデスクワークと並行して、観光と宗教の実態について、バリと沖縄でそれぞれフィールドワークをおこなった。沖縄については、観光と宗教の関係を慰霊観光という形態において捉える可能性に思い至り、データ収集に着手した。現地での参与観察はまだ十分なものではなかったが、これを文献研究と組み合わせることで、議論構築の可能性を探る作業に入った。バリについては、新規のトピックの発見はなかったが、これまで自身が収集したデータと先行研究の文献データを総合し、1920年代から現在にいたる100年間のバリの観光と宗教のあゆみを整理するという議論可能性に思い至った。

(3)平成27年度は、理論研究の面で、前年度から継続して取り組んだ作業に肉付けを行い、ある程度の見通しを得ることができた。また、民族誌的研究の面でも、とくに沖縄の慰霊観光についての論点整理に集中的に取り組む時間を設けた。その成果として、いくつかの論文を同時並行で執筆し、また一部については刊行を果たすことができた。

ひとつは、ギアツのバリ宗教合理化論とヴェーバーの宗教合理化論との差異と共通性を整理した5月の文化人類学会における発表(査読付き学会発表)に修正を施したものであり、これは日本文化人類学会の学会誌に投稿した。年度末から平成28年度にかけての査読と修正の作業を経て、これは平成28年度に学会誌に掲載された。また、この論文とも密接な関連を有する、マックス・ヴェーバーの合理化論の認識基盤を文化人類学の民族誌的研究との関連において整理するという作業にも取り組んだ。こちらは、やはり年度をまたいで、平成28年度に学内誌『アカデミア』に掲載された。

また、平成25年度に刊行した『反楽園観光論』の議論に、観光の支配性という論点を新たに加え、楽園観光の構造的特徴を整理した論文を執筆し、日本島嶼学会の学会誌に投稿した。こちらは掲載がかない、平成27年度中に刊行された(査読付き論文)。

また、戦後の沖縄本島地域における観光と宗教の関係を、慰霊観光から楽園観光への転

換という通時的な視点から、また観光支配という理論的な観点から捉えた議論を、年度中に執筆した。これが、「地上の煉獄と楽園のはざま」という『人類学研究所研究報告』に掲載されたやや大部の論文である。文献資料が中心の論文ではあるが、いくつかのデータ(インタビューデータ、写真などを含む)は、慰霊祭や、那覇市の図書館や公文書館で報告者自身が収集した。ほかに、石垣島・西表島などの八重山の島々でも、本研究課題に関する継続的な資料収集を行ったが、こちらは十分な成果につなげるには至らなかった。ほかに、沖縄では、ひめゆり平和祈念資料館において、本研究課題に関する資料収集を行った。八重山よりも、このひめゆり平和祈念資料館の方に、慰霊観光から楽園観光へという沖縄の観光と宗教のあり方のおおきな流れとの関連において、トピックとして取り上げるべき論点がある、という認識に至った。バリにおいては、直近の時代における観光と宗教の関係について、継続的な資料収集を行った。また、バリに関しては、民族誌の文献データの整理を進め、1920年代から現在にいたる100年間のバリの観光と宗教のあゆみを整理するという議論の方向性が、ある程度みえるようになった。

(4)平成28年度は、研究の最後の年となった。昨年度に続く作業を進め、成果としては、ヴェーバーの合理化論の認識基盤について整理した論文を完成させ、学内誌に掲載された。また、文化人類学会誌に投稿した論文が掲載された。以上が理論研究における成果である。民族誌研究の面では、具体的な成果を刊行物として上げるには至らなかったが、引き続き沖縄では、ひめゆり平和祈念資料館について重点的に調査し、那覇の古書店を回るなどして文献資料の収集にもつとめた。また、バリでは、文献資料の整理を通じて、これまでの100年間のバリの観光と宗教の関係を整理する上で、まだ欠落している穴を補うようなデータ収集を行った。とくに、サヌールという観光地にあるホテルと寺院の関係の現状について確認し、現地でインタビューデータを収集できた点が、特筆すべき成果であった。

(5)以上、各年度の作業と成果について記述した。ひめゆりについてはまだ研究の途上であるが、慰霊観光から楽園観光への転換という大枠の議論の中にこれを組み込んで、沖縄本島地域の観光と宗教の70年余りの歴史は整理できるであろうという見通しはもっている。また、バリについては、100年間におよぶ観光と宗教の関係のおおよそのあり方を、今後記述していくことは可能であろうという見通しをもっている。理論研究の面では、合理化論とリスク社会論とを架橋し、現代社会理論の枠組みと楽園観光論とを接続する作業が今後必要になるが、当初の計画

にあった単著の執筆という最終的な目標に向けて、全体としてある程度の見通しを得るに至った。現段階では、この最終的な目標をいつに、とまでいうことはできないが、できる限り早く、単著の執筆そして刊行にこぎつきたいと考えている。

<引用文献>

- 1) 吉田 竹也 2005 『バリ宗教と人類学 解釈学的認識の冒険』、風媒社。
- 2) 吉田 竹也 2008 「バリ宗教と人類学 人類学的解釈学の探求」、大阪大学大学院博士論文(人間科学)。
- 3) 吉田 竹也 2011a 「世界の夜明けのたそがれ 楽園観光地バリの明と暗」『アカデミア人文・自然科学編新編』1: 1-30。
- 4) 吉田 竹也 2011b 「バリ島のエコツーリズムの逆説」『島嶼研究』11: 35-43。
- 5) 吉田 竹也 2012 「反観光論に向けてのプロレゴメナン」『アカデミア人文・自然科学編』3: 175-198。
- 6) 吉田 竹也 2013a 「シミュラークルと沈黙の絵画 バリ島の観光地ウブドの絵画をめぐって」『人類学研究所研究報告』1: 181-200、南山大学人類学研究所。
- 7) 吉田 竹也 2013b 『反楽園観光論 バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』、人間社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

1. 吉田竹也 「バリ宗教の合理化論をめぐる再検討—ギアツからヴェーバーへ」『文化人類学』、査読あり、81 巻 2 号、2016 年、pp. 302-311。
2. 吉田竹也 「ヴェーバー合理化論の基盤認識と人類学—客観性・因果連関・歴史の叙述」『アカデミア人文・自然科学編』、査読なし、12 号、2016 年、pp. 1-21。
3. 吉田竹也 「地上の煉獄と楽園のはざま—沖縄本島南部の慰霊観光をめぐって」『人類学研究所研究報告』、査読なし、3 号、2016 年、pp. 41-94。
4. 吉田竹也 「楽園観光地の構造的特徴—シミュラークル、脆弱性、観光地支配」『島嶼研究』、査読あり、17 巻 1 号、2016 年、pp. 1-20。
5. 吉田竹也 「書評 東賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田卓(編)『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』」『年報人類学研究』、査読あり、5 号、2015 年、pp. 151-158。

〔学会発表〕(計 2件)

1. 吉田竹也 「ギアツからヴェーバーへ バリ宗教合理化論の再考」、日本文化人類学会第 49 回研究大会(日本文化人類学会)、2015 年 5 月 31 日、大阪国際交流センター(大阪市)(査読付き学会発表)。

2. 吉田竹也 「リスク社会の中の楽園観光」(分科会 A 「楽園観光の現在形 イメージからフィールドへ」)、日本文化人類学会第 48 回研究大会(日本文化人類学会)、2014 年 5 月 17 日、幕張メッセ国際会議場(千葉県幕張市)(査読付き学会発表)。

〔図書〕(計 1件)

1. 吉田竹也 『反楽園観光論 バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』、2013 年、人間社、p. 414。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 竹也 (YOSHIDA, Takeya)  
南山大学・人文学部・教授  
研究者番号: 10308926

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号:

(4) 研究協力者

( )

以上